

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年  
5月号

毎月23日発行  
通巻405号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年5月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1-0015  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



拝殿前の桑の花 矢追房子さん撮影(文・5頁)

編集部座談会

## 神ながらの宗教——法主様に聞く(中)

平成元(1989)年2～3月頃

瑞光院にて

### 霊界と現界の仲人役

平田弘之 法主さんが『すさのお』に「一大事の因縁」を書かれている中で、大倭神宮のことを言われています。古い大倭のスメラミコトの霊がこもっておつて、それを知らしめるというようなことを書いてあった記憶が少しあるんですが、それもやっぱり、今言われたような後ろにおられる日の聖という人の使命なんですか？

法主 まあそうやわな。古代史や神話は、学問として、よう研究されておるけれども、登美の辺りの問題となるとほとんど出てきやへんわな。霊界で見たら恐ろしいところやねんけどな。そんなことは言うたつて、科学的な実証無いしね。

岸野春子 いずれ古墳か何か出るかもしれない？

杉本順一 古墳は、時代的に大倭神宮より新しいんところがう？

法主 古墳みたいな新しい問題と違うねん。

平田 それはまだ目に見える範疇の話か？  
法主 歴史的な時代で言うたら、旧石器以前ぐらいからやないと、話が合うてこないと思うけどな。

例えば神武天皇とかは、伝説のような、歴史のような、神話みたいな……けど、あれはそう古いことないと思う。大体、古墳時代の出来事やと思うねん。それを五・六百年ぐらい後になって、一つの物語としてまとめるんやと思うけどな。

確かに九州からこつちへ大集団で移動して来て、神武天皇みたいな人は霊界に居るんやで。歴史学者によつては、それは崇神天皇の頃とちがうかと言うけども、あるいはそうかも分からんし。平田 長曾根彦とか聖徳太子とか光明皇后とか、法主さんの話に出て来るんですけど、それは流れとして、何かしら関連性があるんですか？

法主 霊界では関連性持つてるんやわな。  
 霊界に日聖というのが居つて、私はその影として現界に出てるわな。今度、私が死んで、また誰か私の影になるものが生まれてきたら、それをいわゆる転生とか生まれ変わりとか言うんやな。そういうのが霊界の繋がりでね、皆、因縁があつて出てくるねん。

私が現在に於いてこの仕事をするんでも、聖徳太子という人の波長をものすごく受けてるんやね。前に、英国人のコックスさんという女の人が来た時に、私と座つて話したら、聖徳太子が見えると言うねん。それは結局その波長を受けておるんやな。大倭へ来る前に京都府の綾部におつて、そこでもう分かつてたと言うねん。どこまでほんまか知らん。

矢追房子 背後霊かな(笑)。  
 矢追鈴月 何か知らんけど、コックスさんが言わはつたんは、私も聞いてたわ。

法主 うちの生母さんでも、私が行つたら、聖徳太子が付いて歩いてるといふようなことを言うておつたね。何かの因縁があるのやろ。歴史の中で矢追家の先祖さんが、聖徳太子に仕えていたといふような家の伝説はあるけどね。

しかしね、私自身が聖徳太子の生まれ変わりとあつたのとは違うねん。どう言うたらええのかな。聖徳太子は霊界に居つて、その波長が私に来るねん。

それでまた霊界で言う日の聖というのは、聖徳太子一人でもないねん。もう一つ向こうの中国も入つてるし。だいたい仏教系統やけどね。そういうのが皆重なつてくる。日の聖は、一人や二人じゃなしに、何回か転生してきているものが重なつてくるのやな。その途中に、釈迦も入つておるかも分かれへん。これは分からのやけれどね。そういうふうには皆入つて来ておるから、日本的な神ながらという自然主義的な形のもの、仏教のように哲学的な教えでもつて流れてくるものが、どこかで一致しておると思うんやな。

大倭教は、別に教理とか教えとか仏教哲学みたいなものは表に出してない。けれども、たとえは自然の摂理を、宇宙・地球物理学として科学者が研究しておるわね。それが神ながらの宗教の本当の教理と言つていいんだけど、それは今は科学として扱つておるから、宗教とは切り離して考へておるわな。

煎じ詰めたらね、神ながらというのはあまり難しすぎて、ちゃんと説明出来へん。仏教の哲学の方が説明しやすいんやわな。仏教的に坊さんが説教する場合でも、春になつたら芽が出るとか、秋になつたら木の実がなるとか、自然を対象とした説明のしかたが多いわな。私は神ながらの宗教の哲学的な教理というものをよう作らん。けど、それは仏教で尽くされておると思うねん。

終戦後、私は大倭教としてやつてるけども、これと新しく、これが大倭教なんだと言つて出すようなものあらへんねん。過去の哲学者やとか、聖人とか賢人とかによつて、知識や言葉としては全部出し尽くされてるわ。今更、大倭教の新しいものなんて何にもあれへん。

ただ、矢追日聖という者が、霊界の日の聖の一つの光を受けて、こうして仕事をさしてもらつて

るといふことだけは、他の宗教と違ふところやねん。それだけは違ふ。けど、他は今日までに全部尽くされてきておるわ。大倭教なんて何にもあれへん、空っぽや。

けれど、今の時代に、因縁ある人が寄つて来て、みんなが幸せにいくような社会作りをしていくという、これが今の私のお役目やと思うけどね。

結論から言うと、私が言わんとしているところは、霊界人も人間なら、現界の人も肉体を持つている人間。そこで霊界人の人間と、現界人の人間とが交流して仲良くすることが、人類平和の根本やと私は思う。最後はそれだけや。それ以外にないねん、結論は。

それを世の中に知らして行つたら、私のお役目はそれでええねん。私は霊界と現界の仲人役しているわけや。私の後ろに偉い虎がついておるさかいに、それがあつては出来んねん。

## 私の個性と宿命

法主 私の個性からしたらね、宗教とかこんな仕事嫌いやねん。それがやらんといかんようになってくるのが、宿命ということかね。大倭神宮のいろんな問題がなかつたら、学校を卒業した後、どこに勤めもせんと、もう大和の発掘、そんなことばつかりしてたと思うわ。これだけ開発してるから、方々でいろいろ出てくるやろ。今日はどこぞこの調査や言うてやつてたと思うわ。私の気持ちから言えば、そんなことが好きやもん。けど、神さんの道になつてしまった。これは宿命やわな。

こんな道で行くべき宿命ということは、前から予言されていたんやけどね。うちの母親(生母さん)も、祖母のおキシさんも神憑りで、「お前が神さんのことやるんやで」て、いつも言われて大

きくなつてきてんから。持って生まれた宿命というものは、自分の意志で、どれだけその道から反れよう逃げようと思たかてあかんわ。最後は引き戻されるわな。

もう逃げようとも思つてへんよ。そうは言うても神さんを扱う仕事やから、宿命の中でも、結構なええ宿命やねんで。その点は喜んでるけれども、気持としたら好かへんねん、こんな仕事。もう出来るだけ普通に、凡人らしく生きたいという気持があるんやな。

月次祭なんかには教服を着て人の前で座つて、みんなと相談してる、あれは本当言うたら半分苦痛やねん。相手の人が皆、礼を低うしてくるやろがな、あの態度が嫌いやねん。気の毒になあと思うねん。頭下げて挨拶したら、何にもそのくらい丁寧な、挨拶してくれんでもええのに思うんやな。そんな個性やからね、こんな仕事あんまり好かんねん。対対でいきたいねん。

菅原園でも園長やから一番の決定権は持つてるねん。命令したらええねん。それは許されてるわな、社会的に。ところが私は絶対嫌い。職員さんよりも気持を低くしてるんやで。私はた、園長という名前だけで顔も出さないうても、職員がオムツ替えてくれて、面倒見てくれてるやろ。結構やなあ、ありがとうという気持でおるんやで。私は園長やからいうて、上から見るような心を持つたことないよ。命令して「何せえ、こうせえ」という言葉もよう使わん。「すまんけどしてくれへんか」とかな、そんな気持になるよ。これはもうしかし人間の個性やからな、しょうがないわな。

それでも私が行つたら職員さんが出て来て、いつも草履出してくれるねん。私は「おおきに」言うて頭下げたい気持になるんや。別に私の草履を出すのに給料もらつてるのどちがう。それは心やも

### こだまことだま

三月二十三日月次祭において、『とおやまと』三月号で法主様の福祉についてのお話を読まれた感想として、矢追家麻呂教長より、大倭安宿苑の今昔を、福祉制度の変化を軸に語られたものを編集部の方でまとめました。（教長さんは大倭安宿苑の事務局長です）

#### 与えられた福祉から選ばれる福祉へ

今までの社会福祉というのは、国が責任をもつて実施する事業でした。しかし、民間の協力を得ないとやっていけないという事で、大倭安宿苑のような民間の社会福祉法人が存在するわけです。その代わりに、必要な経費は全部国の方が支払うという制度になっておりました。これを措置制度といえます。

措置制度では、施設職員の配置や給与についても基準や規則が厳しいのですが、入所者に関しては、施設の定員が割れましても、役所（福祉事務所）が新たに入所者を措置してくれるという形でやっておりました。一人当たりにかかる費用も、国で決められた額が支払われておりましたので、施設側ではよりよい処遇を工夫する事に重点を置いておけば、経費に関して心配する事は少なかったのです。当時は、入所者が自分の入りたい施設を選択できず、役所側が考えて入所先を決めていたんです。こういった措置制度の事を私達は、「与えられた福祉」と言っていました。

のね。好意でやってくれるんやから、ありがたいわな。そんな気持でいるんやけれどもね、それがどれだけ人に通じるか知らんで。通じなくてもか

ところが、今では制度が変わり、どの施設を利用するか、利用者本人が「選べる福祉」へと変化してきます。三年前より介護保険が導入されましたし、昨年四月より菅原園の方でも、支援費制度という契約制度に変わりました。

須加宮寮というのは生活保護の施設です。これは日本の国が潰れんかぎりやっていかんならんもので、国が最低の生活を保障するという事なんです。それでも国から入るお金はだんだんと減ってきています。長曾根寮と菅原園は、利用者が選べる制度に変わりましたので、これからは福祉の方でも、一般企業と同じように、自分達でしっかりと考えてやっていかないと、昔と違って運営も難しいという事なんです。利用者が選ばないという事で潰れた特別養護老人ホームもあるそうです。

こういった現状ですので、安宿苑でもコンサルタント会社からアドバイスを頂いて、今年度より新たな人事システムの導入を図っています。今、安宿苑の理事長も、法人をさらに発展させていこうということで努力しています。特に心の問題ですね。利用される人をきちんと暖かく受け入れることができたら、必ずまた安宿苑の施設を利用して頂けるという事なんです。

法主さんが安宿苑を始められた最初の心というのは、時代や制度が変わろうが、変わらんわけです。私達は世間一般的なものの考え方をしていたら、法主さんのやられて来た事が生きてこないのではないかと思いますので、形は変わっても、変わらぬ心のある、利用して頂けるような安宿苑を創っていききたいと思います。

まへんけども。宗教でも教祖というたらトップやわな、その位置が気に入らんのや。それより、平等に、みんな

と同じところにいたいねん。それが私の人間としての個性やな。

病院でも一緒や。総長というような名前付けてくれてはるけど、いつでも気持は下でおるよ。看護婦さん一人にでも頭下げてんねん。頭ごなしにポンポン言うわん。これはまあしょうないけどね、昔から「下がるほど、人の見上げる藤の花」やとか「実るほど、頭を下げる稲穂かな」という

風ぐるま

## 凍れる音楽

「ゆく秋の 大和の国の 薬師寺の

塔のうえなるひとひらの雲」

境内に佐々木信綱の歌碑が建っている。裳階（もこし）をつけた三重の塔は一見六重の塔に見間違う。飛鳥時代の優雅な東塔だけが残っている薬師寺は、一部崩れかけた土塀の風景で描かれる『古寺巡礼』（和辻哲郎）や『大和古寺風物詩』（亀井勝一郎）が書かれた時代から少しも変わっていないかった。学生時代、境内の藤棚の下の古びたベンチにすわり、礎石のみ残る西塔跡から東塔を眺めるのが好きだった。法隆寺の五重塔の力強い美しさとは趣の異なる優美なたたずまいがあった。天平2年（730年）に建てられたといわれるこの塔を、明治時代に来日した米国の美術史家フェノロサは「凍れる音楽」と称えた。

中国の物語で、子どもでも知っている有名なお話といえば『西遊記』だろう。はるかシルクロードのかたに経典をもとめて、三蔵法師と異形の弟子たちの冒険の旅。ごぞんじ、孫悟空が如意棒を片手に大暴れ。広大なアジアを舞台にくりひろげられる中国古典の名作『西遊記』。

ようなことわざもあるし、人間としても結局それがええことやと思うんやで。そこから低姿勢でおって、自分では満足しておるねん（笑）。

端の人が、形はいつも上に付けてくれるのや。私はその逆に、心は下にもっていつてんねん。これは私の人間としての気持やけどね。宗教でも、高座に座つたり、高座からもの言うたり話すのは、あんまり好かん。（続く）

## 東京部 矢部 頭

この春、わたくしは日本の中高生を引率して中国の中学校（中学と高校が一緒になつている）・北京月壇中学を訪問した。その時、『西遊記』の物語を中国語で劇発表する機会をもつた。

中国の古典を、日本の子どもたちが中国現地の子どもたちのままで、中国語で劇発表するなどという時代が来ることを、かつての中国の大人の人たちは想像することができたであろうか。日本の侵略による植民地政策で日本語を強制された歴史があり、いまなお日本の学校の歴史教科書問題が政治課題になる日本と中国の関係のなかで。

隋から唐に変わる時代、河南省で生まれた（600年）玄奘は、13歳で出家するほど勉学につとめ、入門してからも学問を究め、ついに中国において教えを乞う人は誰もいなくなる。そして、天竺に行くことをすすめられる。翻訳で学ぶ仏教の学問の限界を感じたのであろう。鎖国をしていたなか密出国をして（627年）天竺に向かう。艱難辛苦の旅は3年ともいわれる。17年間の試練の求法の旅のインド留学を終えて645年に帰国し、その後19年間に1335巻の経典を翻訳したとい

われる。そのなかで私たちにもつとも身近なのは「般若心経」。664年に64歳で永遠の眠りにつき、長安郊外・白鹿原に葬られたと伝えられる。長安（西安）の大慈恩寺にある大雁塔。ここには玄奘が翻訳した膨大な経典が収められている。

信じ難い話であつた。玄奘三蔵の遺骨が日本にあるとは。

日中戦争のさなか、1942年12月、南京郊外に侵略していた日本軍が工事中に石棺を発見。その石蓋に玄奘三蔵の銘とともに、改葬の銘が刻まれている。唐末期の戦乱さけるため、一部頂骨が南京に葬られたようだが、いつしか所在不明になつていたとのこと。日中間の不幸な戦争の時代にこんなことがあつたとは。1944年に分骨をいただいて日本にもちかえり、東京芝の増上寺に奉安。その後東京空襲の戦火をさけるため、埼玉県岩槻市の慈恩寺に疎開。1950年、慈恩寺に御影石造りの13重の日本玄奘三蔵霊骨塔ができた。

わたくしが学生時代に、幾度か境内にたたずみ東塔を眺めたあの薬師寺は、その後、金堂、西塔、講堂、回廊、中門と次々と伽藍が再建されて、建立当初のきらびやかな極楽浄土の風景が生まれてきた。崩れかけた土塀は見当たらず、立派な塀に変わつていた。

これらの伽藍再建には、最後の宮大工といわれる西岡常一棟梁の存在なくては語れない。法隆寺直属の宮大工の家系に生まれた彼は、法隆寺解体修理のなかから、昔の匠の技を学びとり、木を生かす大工の技術を蘇らせた。樹齢1000、1300年の桧を使用し、その木の命を生かす技があつたからこそ、法隆寺や薬師寺の塔は1300年の時を経ても倒壊することなく、当時の美し



い姿のまま建っている。「樹齢1300年の松は切り倒され伽藍となるが、切り倒されたとき死ぬのではなく生きつづける。その後、強度は増していき1300年でピークを迎える」ということを知った時はほんとうに驚いた。しかし、木の命を生かすスキルがなければそうはならない。飛鳥時代にはそのスキルを持った大工がいたということ。『法隆寺を支えた木』（NHKブックス）ほか多数の彼に関する著作があり、それはすべて感動と発見に満ちている。

「鉄のボルトを入れて強度を増すように」とか、「仏像を火災から守るためにコンクリートを使い」という現代の建築学の権威と、「鉄やコンクリなんかは100年ももたん」と大論争を繰りひろげたことがある。「1300年前の飛鳥の工人の技には現代では追いつくことができない」とも。木の命を生かす技を自らの腕に叩き込んでいたからこそ言えることばだ。その技とともに、伽藍をつくる誇り高いスピリットがあった。

彼は言う、宮大工口伝一番、「神を崇めず、仏を拝せずして、堂塔伽藍を口にすべからず」。

金堂に続いて、西塔が落慶された1981年、慈恩寺より玄奘三蔵の分骨を薬師寺にお迎えした。薬師寺は玄奘を始祖とする法相宗の大本山で、1991年には玄奘を祀る玄奘三蔵院が落慶された。お骨はその伽藍の玄奘塔内の舍利孔に納められている。玄奘三蔵院は西岡常一の最後の仕事となり、1995年86歳で亡くなった。吉川英治文化賞をはじめ、文化功労者として数々の賞を受賞した。

玄奘三蔵院伽藍のなかの八角形のお堂が玄奘塔。正面に「不東」と書かれた扁額が掲げられている。「不東」とは、西方に向かって生命を賭けて

て、正しい経典を求めて、一歩たりとも東に戻らない探求心を意味している。

大唐西域壁画殿には、平山郁夫（東京芸術大学学長）描くところの玄奘三蔵の求法の旅をたどる大壁画「大唐西域壁画」が納められている。高さ2・2m長さ49mのそれは、シルクロードへの百数十回にも及ぶ旅から30年の歳月を費やして2000年12月完成されたもので、平山郁夫の名を知らしめた名作「仏教伝来」（1959年・佐久市立近代美術館蔵）のときからの生涯のテーマの結びでもあるだろう。「何十年という歳月をかけて壁画制作に向かうことは、私にとつての菩薩行となり、この経験を通じて、玄奘に対する思いは深く募っていきました」。玄奘三蔵に導かれた画業といわれる所以である。

大工・西岡常一が伽藍建築で表現してきたように、画家・平山郁夫は玄奘三蔵の魂を絵で表現してきたといえる。

奈良はシルロードの終着駅といわれる。文化、学問、芸術、宗教、あらゆるものが東の果てに到達した。正倉院の宝物を見るまでもなく、仏像の台座にもそれはわかる。ペルシャのぶどう模様、ギリシャの唐草模様、インドのストゥーパ、中国の四神……。

日本からは中国に留学して学問を求めた人がたくさんいた。直接、玄奘の教えを受けた人がいる。道昭という人で、8年間長安で学び、帰国して法相宗を日本に伝えたといわれる。「仏教を東へ」という思いを日本の高僧が引き継いだ。

中国の中高生が見守るなか、日本の中

高生たちは中国語による『西遊記』の劇を演じた。日本の中高生たちが中国語の台詞にまると、見ている中国の子が助太刀して台詞を重ねて言ってくれて、心を合わせて応援してくれた。子どもたちは、伽藍建築でもなく、絵でもなく、ころとことばとからだで表現する。

はるか1300年の時空を超えて、玄奘三蔵の天竺への旅の物語が、日本の子どもたちによって中国語で演じられるとは、なんと不思議なことであることか。物語のテーマが、こめられた魂のシンフォニーが、子どもたちの心の琴線をふるわせ奏でる。物語という凍れる音楽に込められた悠遠の願いが、子どもの心のなかで蘇えり響きわたっていくのだろうか。物語が持ち続ける偉大な力といえよう。

### ●表紙写真・桑の花について

矢 追 房 子

花咲き実の成るは当然のことなのに、いつも実ばかりしか目が行かず、食べたり桑酒にしたり、花の開いている所など見たことも無かった。

表紙写真は、川端一弘さんに、「拝殿前左側にある桑の木に花が付いているよ」と示されて、初めてじっくりと見させて頂き、写したものです。皆さん御存知でしたか。

この桑の木は、日元さんが大倭に入られる前からあったとの事で、今の大使館の辺りは桑畑で、たくさんあったそのうちの一本がそのまま残ったものだそうです。

桑の木は周知の如く落葉樹で、葉は蚕の飼料です。養蚕栽桑技術は八世紀頃から全国的に普及しましたが、その頃は自生桑から取ったものが多かったらしい。

桑年は四十八歳の称で、桑の略字が「桑」と書くので四個の十と八となっているからと漢和辞典にありました。

走り梅雨 シャワーの如き 音たてて

緑の樹々の 喜び聞こゆ

## 第278回大倭会文化行事報告

## 「田村堂」と「アテルイ・モレの碑」へ

林 修 三

平成16年4月18日午前10時半頃、天下の名勝、京都東山清水寺の山門前には、快晴の空の下、大倭に縁ある方々が総勢47名も（大人40名・子供7名）集合されていた。挨拶をされた中西会長の言をお借りすれば、

「大倭会文化行事始まって以来」の多人数であった。この日は世話役でいつもご苦労をおかけする湯浅芳郎さんは他の用事で欠席されたが、このような大勢の参加者を目にされれば、どれほどか喜ばれたのにと少し残念に思った。湯浅さんのピンチヒッターは高橋良美さんが務められた。

杉本順一さんからは、「本日は法主様も一緒に参加されている。坂上田村麻呂とアテルイ、モレに代表される、千二百年前の争いで亡くなっていった方々の、双方の思いを汲んで、現界の私達が共にお参りするのが今日の文化行事の要である。と

いっても難しく考える必要はなく、ただ楽しく遊べばそれでいい」という主旨のお話もあった。そして、いよいよ若葉美しき寺内の散策が始まった。それにしても、紫陽花邑からあるいは遠方から、また禊会でご一緒する方、初参加の方、青山日元さんや岸田哲さんのお母さんのように車椅子持参の方、本当に様々な方々のご参加があった。この種々様々なご縁の方々の今回の参加には、偶然はない、やはり何か大きな大倭霊団、ひいては日本霊界の動きまでがリンクしているのか……。

私事になるが、話は文化行事の3週間程前の3月24日にもどる。その日、今回の文化行事にも参

加された廣瀬隆憲さんと私は、お互いの自宅の近くにある枚方市宇山のアテルイさんと、そのお仲間であるモレさんのお墓であるとされる場所に向いた。このお二方については、昨年、私が案内役で大倭の有志の皆さんがここを訪ねられた時の杉本さんの記事（『おおやまと』平成15年4月号）に詳しいのだが、繰り返しておく、今を去る千二百年程前、時の桓武天皇の政策により東北地方の先住民達は戦いを強いられた。が、押し寄せる数万の朝廷軍と果敢に争い、幾多の勝利を収めていた。その先住民達のリーダーこそがアテルイでありモレであったのである。

西暦797年、ついに一代の英雄坂上田村麻呂が征夷大將軍となり東北での戦いに腕をふるうと、さしもの先住民族軍もその軍門に下ることになる。この時、おそらく両者の間には密約もあり、アテルイとモレはおとなしく田村麻呂と共に、時の新都、平安京へと従い来たのである。しかしこの二人を恐れる、現場を知らない権力者である都の貴族達の命令で、現在の枚方市宇山の辺りで処刑されてしまう。

この結果に、夫人である三善高子氏と共に、観音信仰に篤かった田村麻呂の心中は如何ばかりであったのか……。

もう一つのエピソードをお許し願いたい。4月9日、大阪市中央区の難波宮跡にほど近い大槻能楽堂で、数名の大倭に縁のある方々と共に、五十嵐輪孺美さんのお能の先生である久保誠一郎氏による「田村」の舞台を観賞していた。不覚にも「田村」が坂上田村麻呂の「田村」であると演目が目の前で演じられるその時迄、気が付かなかつた。冒頭で、生涯の想い出にと京の都に初めて上り清水寺を訪れた東北からの旅の僧が、童子として現れた田村麻呂の霊に出会い、清水寺が田村

麻呂の観音信仰による創建であるという由緒を聞く。やがて語り終えた童子は、不思議にも境内の「田村堂」の内へとかき消えてゆく……。

その時、私は確かにこの能舞台から一つのメッセージを受け取っていた。「清水寺への文化行事の折には「アテルイ・モレの碑」にだけではなく、是非「田村堂」にも参るようにな」と。

そして当日、念いが結んだ一つの流れは、大倭の方々をかつての敵対者同士であった、坂上田村麻呂の鎮座する「田村堂」と、アテルイ、モレを記念する「アテルイ・モレの碑」（平安京千二百年記念の一九九四年、同郷の人達の顕彰碑建立の運動に清水寺が賛同したものという）の二ヶ所へ誘い、両雄にまつわる多くの争乱の内に亡くなっていた方々への慰霊、鎮魂の集いとした。

千二百年前の昔も、その以前も、それから現在迄の人の歴史の中にも、数多くの争いが行われ、今もこの世界のそこかしこで悲しみと怒りの連鎖は引き続いている。それを断ち切る事の出来る唯一の道は、「顕幽不二」を理解する一人一人の人人の心の内にこそ眠っていると思うのだが……。

この日、田村麻呂とアテルイ、モレに縁のある方々の霊魂は一層、和解を深めたであろう。その心のように、晴れ渡る初夏を思わせる東山の空は、澄み切って美しかった。

それにしても霊界には、順序や時機というものがある、厳然として存在するのだろうか。「田村堂」から「アテルイ・モレの碑」迄の距離は、高低差があるにしても直線にしてわずか数十メートル。私たちが十数分間で歩いて繋いだ二つの霊界の和解には、現界において千二百年の時を必要としたのだ。

逆縁も もらさず救う 観音に

結ぶ念いの 清水の滝

# 寸 莎

## 第59回

### 竹 内 靖さん



### レベルアップへの意欲

「昨日のみどりの日には、近鉄生駒駅から出発して大阪側の枚岡神社まで山越えして、また生駒駅まで軽い山歩きをしました」と、インタビュを始める前に竹内さんは嬉しそうに話してくれた。今回の「寸莎」に登場してもらおう竹内さんは大倭殖産の総務部次長であるが、山歩きというきわめて健康な趣味の持主でもある。

竹内さんは昭和二十九年四月に、現在の兵庫県三田市で三人兄妹の末子として生まれた。NHKがテレビ放送を開始した翌年のことである。父親が国立病院の事務畑の仕事をしていて関係で、奈良・京都・福井と何度も転居し、「小学校は三校、中学校は二校、高等学校は二校と何度も転校をくり返したので、いわゆる『幼馴染み』がない」と淋しがる。

また、「母親が病弱だったので、姉に学校に連れて行ってもらうつたり、いじめられると姉さんが助けてくれて『姉ちゃん子』だった」という思い出が残っている。子供時代には、「寿司職人になりたい」という夢があったという。

高等学校では理数系に進んだのだが、「もともと文系の人間だったので」、関西学院商学部に進学した。大学では国際マーケティング論のゼミで学んだので、「英語を駆使して活躍する商社マンになりたい」という新しい夢を抱いた。ただし、「大学生生活で一番夢になったのはマージャンだった」と照れくさそうに笑う。大学での親しいマージャン仲間には、法主様の従弟の田中奇九法氏の次男である田中法明氏がいたというが、不思議な縁を感じさせる。大学時代に枚方の近鉄百貨店で販売のアルバイトをして、「商売の面

白さに魅かれたのがひとつのきっかけになって、昭和五十四年春に二チイ（「マイカル」の前身）に就職し、京都をはじめとして何カ所かのビブレで商品の仕入れの仕事に従事した。

竹内さんの父親の竹内昇さんは、公務員生活の最後に国立京都病院長の事務部長として仕事をしていたが、退職後は昭和六十二年開設予定の大倭病院の事務の責任者になるために開設準備にかかわっていた。ところが、開設前年にガンに冒されて六十歳の若さで帰幽してしまう。

その後、九州の福岡への転勤を命じられた時に、「母親を一人残すわけにはいかないで」、退職を決意し、父親と縁のあった大倭に就職の場を求めることになる。「病院や施設という話もあったのだが、営利事業に興味があったので」、大倭殖産に平成元年四月に入社し、それ以来ずっと総務の仕事に携わっている。「その時に受け入れてくれた当時の社長の柴地則之さんが、その年の九月に急逝されたのはショックだった」と当時をふり返る。

飲酒について尋ねると、「以前は父親ゆずりで大好きだったが、昨年に体調を崩して以来、飲酒はひかえている」という答えが返ってきた。現在の趣味はと聞くと、「三つの趣

味がある」とすぐに答えがはね返ってきた。「ひとつ目は、一月に一回程度の仲間との山歩きで、二つ目は、歴史ものや自分をスキルアップさせるための読書。三つ目は、毎週土曜日に参加している話し方教室での活動」という健全な趣味である。特に山歩きは、「五感をすべて刺激させる最高の体験」だという。

法主ご夫妻との思い出としては、「法主さんはエラくて少し遠い人という感じだったが、鈴木カアさんはザックバランに話しかけてくれたので、よくおしゃべりできて楽しかった」となつかしそうに話してくれた。

これからの抱負として、「建設業界は厳しい状況におかれているが、うちの会社が大倭らしさを出して、小さくともキラリと光る企業になっていくよう努力していきたいし、個人としても自分自身のレベルアップを図っていききたい」と意欲的である。さらに、「大倭グループにはいくつかの部門や団体があり、それぞれのトップは邑交会などでのつながりがあるが、自分たちのような中堅層の者同士も何らかのつながりを持って新たなものを生み出してほしい……」と夢を語ってくれた。

独身貴族ではあるが、女性観はと聞くと、「自分は面食いで……」と頭を掻いた。（聞き手＝岸田哲）

# あじわい日誌

高橋千鶴子さんのお店を訪ねました。その後また、それぞれに京の町や寺を巡った人も多かった様子です。

4月11日 祝会。京都市の三宅淳之さんが久し振りに新妻の博子さんを連れて参加されました。祝会后、教務本庁で李章根さんが呼びかけ、昔の新聞を読み直したりして法主様の教えに学ぼうという輪読勉強会が開かれ、引き続き残った人、勉強会にだけ来た人等15人が参加しました。

4月15日 大倭神宮で箭負祭が行われました。青山日元さんから、法主様のお父さん(矢追隆蔵)と大倭神宮守護霊の鶏嶽大加美とのやりとりのエピソード等を聞かせてもらいました。

4月18日 京都清水寺への大倭会文化行事。詳しくは本文6頁をお読み下さい。自由解散後、大半の人が、邑の古からの友人で清水人形を作っておられる



アテルイ・モレの碑

この日、京都の池田宏子さんが急に来邑、たまたま邑に残っていた旧知の松本モトさんが会いました。

4月19日 鈴月かあさんの満3年のご命日だったので、各自お参りをしてもらいました。

4月29日 大倭病院総看護師長の永田喜代子さんが瑞宝単光章を受章されました。

夜、交流の家で、HANDA(ハンセン病回復者の世界組織の中国支部のような存在)の職員で、FIWCの中国ワー

連絡先  
TEL 0742-41-4615 (双葉館)

**田んぼ通信**

## 田植えのご案内

今年も田植えの季節となりました。無農薬、EM農法で米づくりして7年目の春です。どうぞふるってご参加下さい。

**6月5日(日) 午前9:00~**  
(雨天決行)

※泥で汚れてもいい服装で。  
(着替え、タオルは各自で準備)  
軍手・軍足は用意します。  
※昼食・飲み物は用意します。(持込み歓迎)

お世話になっていいるピビアンさんの歓迎会が行われました。日本観光ツアーの途中、抜け出して立ち寄られたとのこと。ピビアンさんは中国人女性ですが、北京語・広東語・英語・日本語が話せるそうです。

5月6日 大倭神宮月次祭。  
昇ちゃん、ゴルデンウィークにどこへも連れて行ってもらえなかったが、聾啞者の友達と「USJへ行つた」とチラシを見せながら報告。実際は分からないが、にこやかだったから、とにかく良かったね!

5月9日 祝会。参加者21名と子供さん2人。母の日なので「我が母」をテーマに話し合いました。

祝会后、教務本庁で2回目の勉強会が開かれ、13名が参加。李章根さんの話「第1、2回共に昭和58年12月号」「二度のつとめに立つ」を読み合わせました。法主様の言葉(心)にたち戻る事を一つの軸とし、もう一つの軸を、法主様の教えを受けとる側の多様な感性と人生に照らし合わせる事におく事で、新鮮で広がりのある学びの場としたいです。どなたでも気楽にご参加下さい。問い合わせは李さんまで(電話0742-45-0933)。

大倭安宿苑では  
5月10日 社会福祉法人大倭安宿苑成立48周年記念日。早朝の

**第280回大倭会文化行事**  
**アサヒビール大山崎山荘美術館**

—モネの睡蓮とクラシック建築と安藤忠雄—

- 日 時：平成16年6月20日(日) 午前10時30分集合
- 場 所：JR京都線山崎駅改札口
- 交 通：近鉄西大寺にて京都行き急行9時20分に乗り、京都9時49分着、JRの5番乗り場で快速網干行き10時13分に乗り山崎駅10時26分着
- ル-ト：美術館で絵画や建物を鑑賞し付近散策で1日を過ごす。

※昼食持参、雨天決行

■世話役：  
湯浅芳郎 電話 0742-48-3389  
(携帯 090-6987-5847)

# あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
6月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第四二七回祝会  
6月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

祝(みそぎ)とは、自己本霊を覆っている枉罪を祓い加美のお徳を戴くこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」という言葉が一体となってきた大和言葉。祝には、知恵の研鑽によって表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きによって内側から除く方法とがある。

\*月次祭(大倭神宮)  
6月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)  
6月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。